

[4]

氏名	陳 娟
博士の専攻分野の名称	博士(外国語教育学)
学位記番号	外博第 14 号
学位授与の日付	平成 26 年 9 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	清末中国人の日本語学習史に関する研究 —教科書と辞書を通して
論文審査委員	主査教授 沈 国 威 副査教授 竹 内 理 副査教授 山 崎 直 樹 副査教授 内 田 慶 市 専門審査委員 教授 荒 川 清 秀 (愛知大学)

論文内容の要旨

陳娟氏の博士学位請求論文:「清末中国人の日本語学習史に関する研究—教科書と辞書を通して」は下記のように、本文 6 章とその前に緒論があり、巻末に参考文献のほか、「1884-1912 年主要な日本語教科書一覧表」、「1884-1912 年主要な日本語教科書の序言・凡例集」を含む 6 付録の 9 つの部分から構成されており、章の下には節と項が設けられている。

緒論

- 第一章 清末における中国人の教科書の概況と分類
- 第二章 早期中国人の日本語教科書
- 第三章 『東語完璧』を代表とする会話教科書に対する考察
- 第四章 版を重ねた教科書から文法学習の変化を見る
- 第五章 辞書と奇字解類資料に対する考察
- 第六章 結論

参考文献

附録

陳娟氏の研究は、清末(1884~1912)の中国人向けの日本語教科書を考察対象とし、これらの教科書の内容と時代的特徴を分析することにより、近代の中国人による日本語学習史の諸事情を明らかにしようとするもので、また教科書の一部について書誌学的な考察も行った。

近代以降東アジアの人々を対象として発生した日本語教育は、教授者学習者、教育機関、教育内容と教授法などの観点から考察することができる。これまでに日本語教師列伝・お雇い日本人教師や中国人日本留学史、東文学堂に関して豊富な研究成果があげられている。しかし、当時の教科書に関してはまだ系統的に考察が加えられていない。このような事情を踏まえ、陳娟氏は、教科書を基本資料に近代中国人による日本語学習の歴史を跡づけ、中国人の日本語認識をはじめ、発音、語彙、文法等の諸教育を全方位から考察を行った。陳娟氏の研究によって、教育内容に関する事情が大きく解明され、今後日本語教育に有益な知見が提供された。以下、陳娟氏の論文内容について簡単にご紹介する。

前述したとおり、陳娟氏の論文は、緒論と付録を除けば、全6章で構成されている。序章において、本研究の意義と「清末」という時代背景について述べている。

第一章では、陳娟氏は清代以前の日本語学習の概況を説明した後、清末に出版された日本語学習書について、(1) 伝統的なものかそれとも教育機関で使用されるものか、(2) 教授内容、つまり語彙、会話、文法、読解、辞書といったジャンル、(3) 編纂目的、(4) 編纂者などの角度から139点の日本語学習書籍を分類整理した。そして1912年までの日本語学習書の種類と数量上の変化を図示し、近代において中国人による日本語学習の動きを捉えようとした。陳娟氏は1884年から1900年にかけて中国人による日本語学習の初期とし、1901年から1912年の間を後期とし、質的な変化が生じたことを実証している。第一章の概説と分類により、20世紀初頭の中国人向け日本語教科書の全容が提示された。

第二章では、陳娟氏は1884～1900年までの3点しかなかった学習書：『東語簡要』（1884）、『東語入門』（1895）と『東語正規』（1900）を分析した。『東語簡要』は単語と単文の羅列に止まり、まだ教科書にはほど遠いものであったが、中国人に日本語を教えようとする意図を持つ点において中国初の日本語学習書と言える。ここでは著者玉燕の日本語能力、編纂意図、伝統的方言採録書物との継承関係などが考察された。第二冊目の『東語入門』は基本的に『東語簡要』と同じく古いタイプの学習書に属している。著者陳天麒は、駐日公使館の中で日本語の教育を受け、玉燕より正確な日本語知識を有していたが、しかし、公使館は教育機関ではなく、言語教育においては自ずから限界があった。『東語入門』は初めて日本語の発音を実用レベルで教えようとする学習書で、貿易、現地での生活、日本語という言葉についても詳細に紹介された。著者は日本語の知識があり、語学的に日本語と中国語の相違を分析した点も注目すべきである。なお上海で出版された本書は、中国人に広く日本語を認知させた上で大きな役割を果たした。1900年に刊行された『東語正規』は、中国人による最初の本格的な日本語教科書である。著者唐宝鏗、戢翼翬は、日本に派遣された最初の中国人留学生で、日本の中等教育機関で日本語教育を受けていたため、『東語正規』は発音、語彙、文法項目と文章を含め、正式な外国語教科書として編纂された。陳娟氏は『東語正規』について発音法の記述、抽象語彙の導入、文法体系の紹介など

の面から詳細に分析した。この教科書によって、中国人は初めて日本語を外国語として認識し、学習することになったと結論づけられた。この書の後続教科書への影響も論じられた。

第三章では、陳娟氏は1900年以降出版された教科書を取り上げた。初期の中国人による日本語学習は、「書籍翻訳」を目的とする傾向が強かった。しかし、留学生が急増する中、学習目的も多様化した。教科書の編纂者は社会の要請に応えようとし、様々な教科書を世に送り出された。陳娟氏は中国国内向けの教科書ではどのように発音教育を実施したかをはじめ、音声言語としての日本語の教授法について会話書を資料に分析した。陳娟氏は、日本語教授法史の専門家、関正昭氏に従って、日本語教科書を「和文漢読」、「究極の会話」と「日本事情」の三種類に分け、その構成、内容、実際の言語社会での応用可能性などの角度から捉え、最初の中国人向けの会話教科書、『貿易叢談』（1901）の他、当時一世を風靡した代表的な会話教科書『東語完璧』（1903）を考察した。

第四章では、陳娟氏は数多くの教科書に反映された当時の文法知識を体系に捉え、分析を試みた。1900年頃、速成的に日本語を身につけようとする人たちから日本語の語順上の特徴注目した『和文漢読法』が提唱されたが、『東語正規』（1900）では初めてテニヲハ、品詞等文法に関する内容が、説明されるようになった。ただし当時日本語の口語文法もまだ諸説紛々とした状態で、外国人教育文法としてまだ体系的には確定していなかった。また中国では文法知識も術語もほぼ空白な状態で、文法教育が大きな困難に直面していた。陳娟氏は最初の日本語文法書で、文語文が中心であった丁福同が訳した『東文典問答』（1903）を分析したのに続き、また版を重ね、当時では絶大的な人気を誇った『言文対照漢訳日本文典』（1904）をも取り上げた。本書の編纂者松本亀次郎は中国人留学生を教えた実際の経験に基づき、中国人学習者向けの日本語文法書を編纂した。陳娟氏はさらに同じく増刷りを繰り返した『東語完璧』についても、文法教育の内容、文法体系の移動と定着という視点から同書の異版を考察した。

第五章は、日中辞典に対する書誌学的記述である。陳娟氏は清末に出版された中日・日中辞書合計14冊について、分類した上でその編纂目的、様式、収録語彙数などの面から考察した。特に『新釋名』（1904年）、和文奇字解類資料、『日語古微』（1910）を詳細に記述した。辞書類は、日本語の学習のみならず、「新名詞」という新しい語彙の導入、文法知識の普及という点においても重要な資料であり、当時の中国人の日本語意識の変化を見ることができ、近代西洋言語学成立史、近代思想史の研究にとっても基礎的な資料群である。

最後の第六章は本論文の結論である。清末に大量に刊行された日本語教科書を中国人の学習史の中に位置づけ、そして現代の日本語教科書に対する影響などを述べている。

陳娟氏の論文の最大の貢献は、139点もの近代日本語学習書、教科書を全面的に整理分

析したことである。これらの書物に反映された教育内容に関する事情を、教授者・学習者の知識構成、日本語教育機関史等の研究成果と総合的に把握することにより近代中国人に対する日本語教育史を解明するのみならず、今後の日本語教育に対しても正しい指針を示してくれるであろう。

論文審査結果の要旨

論文の提出に先立ち、提出要件審査委員会（委員：沈国威、山崎直樹、八島智子、玄幸子）にて審査することになり、陳娟氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうかを確認した。その結果、同氏は、一）必要単位（8単位）を取得済みであり、博士論文のテーマと関連する分野で、二）論文3編（うち査読あり中国の学会誌掲載論文1編を含む）、三）口頭発表6回（うち国際学会6回、全国大会0回）を有し（以上いずれも提出要件審査時点）、四）博士論文聴聞会（平成25年5月25日）も終え、論文提出のすべての要件を満たしていることが確認できたため、研究科委員会（平成25年7月24日開催）に審査結果を報告し、同氏による論文提出の承認を得た。これを受けて平成26年4月10日までに陳娟氏から提出された論文を学位請求論文として受理し、研究科委員会（平成26年5月28日開催）において承認された論文審査委員会（主査：沈国威、副査：竹内理、山崎直樹、内田慶市、学外委員：荒川清秀）での審査に入った。

提出された日本語論文（本編214頁、付録を併せた総頁は297頁）は、本報告書「1. 論文内容の要旨」において述べたように、陳娟氏の論文は、教授者・学習者、教育機関、教育内容という外国語教育における主要な要素より、教育内容、特に教科書に焦点化し、清末の日本語学習書を包括的に考察するものである。また参考文献に記されているように近代の歴史、文化交流史の研究成果も幅広く取り入れている。現段階で入手できる文献・資料を広く集め、種々の角度から分析し、20世紀初頭の中国人の日本語学習風景を復元すべく実証的に研究を重ねてきた。実物を確認し、それに基づく考察を進めることは当然のことではあるが、インターネット時代での一部の若手研究者に忘れられている研究手法の堅実さは評価に値する。また巻末に付されている「近代日本語学習書一覧表」はこの時期の学習書をほぼ網羅するもので、資料的価値が極めて高い。陳娟氏はさらに輯録書物139点のうちの53点についてその序文、凡例（漢文・和文）を句読点つきで翻字収録している。日本語の分からない歴史研究者や実物が閲覧できる環境にない研究者にとって、非常に有用なものと言える。

以上のように陳娟氏の論文は、清末の中国人による日本語学習史を教科書の側面から考察し、その史実を明らかにした意欲的なものである。

さらに次の3点からも、本学位請求論文は、当該研究分野の空白を埋めるものと判断することができる。

- (1) 1884～1912年間の日本語学習書を収集整理し、1つの資料群として提示することにより、清末の中国人による日本語学習史を学習内容の側面から検証することが可能になったこと。

- (2) 実際の教科書を繙くことによって語彙表現から間接的発音教育の可能性、文法体系、コースデザインまで考察することにより、20世紀初頭の中国人による日本語学習に見られる問題点を分析し、客観的に評価できたこと。
- (3) 清末という歴史空間における動機付け、目標言語に対するビリーフ、習得目的といった学習者側の諸要素が教科書と関連づけその相互作用をも考察の視野に入れることにより、その時代の外国語教育を特徴付けることができ、ひいては今日の中国における日本語教育への示唆が期待できること。

以上により、陳娟氏の論文が、研究の方法や内容、記述の体裁や論理等全般にわたり、所定の水準に達しており、博士論文としてふさわしいものであることを、論文審査委員会一同が認めた。